

## 入選

### 白杖とエレベーター

千葉県 専修大学松戸中学校 一年

池田 恵美

7月13日、午後4時頃。私は自宅の最寄り駅に到着した。電車の中で座ることを優先したため、私は一番端の号車に乗っていた。電車から降りてエスカレーターに向かう途中、帽子を目深にかぶったおばあさんとすれ違った。

そこで私は不思議に思った。おばあさんが歩いていく方には、階段もエスカレーターもエレベーターもない。振り返ると、おばあさんの持っている杖が白くて、先端が赤いものであることに気がついた。白杖だ。じゃあ、おばあさんは目が不自由な方なのだ、とわかった。

すぐ、とまではいかなかったが、私は勇気を出して、

「何かお探しですか。」と声をかけた。

「探しものというわけではないのだけれどね。エレベーターの場所がわからなくて。」

と、おばあさんは困っている様子だった。声をかける直前に恐る恐る覗き込んだ彼女の目は、義眼をつけている知り合いの目と酷似していた。私は、

「エレベーターがあるところまで、案内しましょうか。」

と提案した。おばあさんは、しばし悩むように黙ってから、

「お願いしても良いかしら。」

と言ってくださった。私は「もちろんです。」と答え、彼女の背に右手を回し、半歩前を歩いて（実際は、ひじの上を片手でつかんでいただくのが正しいことを後から知った）、ゆっくりとエレベーターまで歩いて行った。

エレベーターに着いておばあさんとともに乗り込むと、ふと思い出したことがあった。義眼の知り合いが教えてくれたことが、頭の中を駆けめぐった。

「義眼で見えるようになることって、あまりないんだ。だいたいがね、見た目をマシにするってだけなの。」と、話していた知り合い。見えない世界で暮らしていることを思うと、素直にすごいなあと感じる。

エレベーターが改札のある1階に着いたので、おばあさんを誘導しながら降り、二人で出口までまた歩いた。別れ際、おばあさんに、

「どうもありがとう。とっても助かったわ。」

とお礼を言われた。だが、私のとっさに出てきた言葉は、「どういたしまして」ではなく、「はい、お気をつけてください！」であった。「ありがとう」と言われて、「お気をつけてください」と言う人はなかなかいないのではないか。おばあさんは、くすっと微笑みながら去っていった。

視覚障がい者の介助をするのは人生初であり、本当に緊張したことを覚えている。だが、おばあさんを見送った後、彼女の背に触れていた手には、まだかすかにあたたかさが残っていた。

なにげない日常にもたった少しの優しさがあれば、年齢も性別もその身に抱えるものも関係なく、笑顔になれるのだと思った。